紫色の仮面ライダー大体ヤバいやつ説

瀬久乃進

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダークロニクル”紫バージョン”、ＧＡＭＥ　ＳＴＡＲＴ！

檀黎斗の遺した、仮面ライダークロニクルの試作品群。それら試作品には、５色のバージョンが存在した。

プレイヤーは各バージョンに対応する”色”を持つ仮面ライダーたちの力を借りて、他バージョンのプレイヤーとバトル。そして世界を己の色に塗り替える・・・という開発コンセプトだったが、ゲームバランスの観点からお蔵入りしたらしい。

とある事情によってエグゼイドから依頼を受けた呉島光実は、紫色(?)の仮面ライダー・龍玄として、再びステージに立つ。彼の使命は、仮面ライダークロニクル紫バージョンの攻略。つまり・・・曲者揃いの”紫色の仮面ライダーたち”を倒すことであった！

目次

第１話：エグゼイドからの依頼 ―――― 1
第２話：答えは聞いてない ―――― 13
第３話：Ｉｍａｇｉｎｅのライダー！ ―――― 19
第４話：炸裂！必殺のブドウスパーキング ―――― 25
第５話：神の模造品は何を思うのか ―――― 33

第1話：エグゼイドからの依頼

兄の仕事の手伝いを終えた呉島光実は、帰途に就いていた。今日も疲れた。兄・貴虎の肉体はオーバーロードとかそういうのとはまた違ったベクトルで人間離れしているため、彼のペースに合わせて働くと非常に疲れる。貴虎は、２０時を回った今でもオフィスで残務と戦っている。

『兄さん、本当に僕はもう上がっちゃって平気なの？』

『大丈夫だ光実。あとは判子を押すだけだからな』

『うん、確かに判子を押すだけだけどさ』

問題は判子を押すべき書類の枚数で、どう見ても1，０００枚は堅い。大人の仕事は未だ理解に遠い。何をそんなに押印する必要があるのか。

『大丈夫だ光実。経験上、３００枚を超えた辺りから次第に気持ちが昂ってくる』

『それ危ないと思うんだけど・・・』

1枚1枚チェックの必要もあるようで、貴虎はそれを自分自身でやらなくてはならないとしたものだから、結局光実は兄を置いて先にオフィスを出た。

ここは沢芽市。かつて世界を襲った〝理由のない悪意〟の爆心地であり、激しい闘争の歴史を持つ街である。禁断の果実を巡るその争いの中で、光実は数多くの過ちを犯した。光実は代償として多くのものを失ったが、最終的には1人の男の〝理由のない善意〟に守られた。

信じられないことだが、禁断の果実を手にし、運命の勝者となったその男は今や銀河の彼方・・・ある惑星の王を務めている。物理的にも、精神的にも、彼は遠くへ行ってしまった。

・・・と、思っていたのだが。

光実のポケットの中で、スマホが振動した。着信。画面を見ると・・・

《葛葉紘汰》

最近、葛葉紘汰の治める惑星には携帯電話の技術が生まれたらしい。そして、地球との通話が可能になったらしい。禁断の果実、なんでもありかよ。光実は電話に出た。
「もしもし。光実です」
『おうミッチ！元気してるかよ？』
「元気ですよ。大学は春休みですが、今日は兄さんの仕事の手伝いをしてました。会社の決算なんですけど、かなり爆弾が残ってて後処理が大変らしいです」
『爆弾？大変だな！ドライバーはあるんだろ？作業にロックシード足りなかったら言ってくれな！』
・・・物理的な意味での爆弾ではないのだが、気遣ってくれているので素直にはい、と言って話を区切った。光実は紘汰に用件を訊く。
『おう、いきなりで悪いんだけどさ、ちょっとお願いがあってな』
「お願い？」
『ああ、って言っても俺じゃなくて、エグゼイドからのお願いなんだけどさ』
・・・エグゼイド。それは、少し前に世界を救った仮面ライダーの名前だった。沢芽市の闘争の後にも、この世界には様々な災厄が絶えず降りかかった。グローバルフリーズ。デミアプロジェクト。そして、直近のバグスターウイルス感染症。いずれも世界を崩壊寸前にまで追い込んだ大事件であったが、幾人もの仮面ライダーたちの活躍により、なんとか今日も人類は存続している。エグゼイドとは、バグスターウイルスのパンデミックから世界を救ったドクター・宝生永夢の変身する仮面ライダーである。
「はあ、エグゼイドの宝生先生が僕に？」
『いや、なんかさ・・・緊急で紫色のライダー探してんだって。バグスター絡みでクリアしなきゃなんないゲームがあって、なんか紫色のライダーじゃなきゃダメらしいんだ』
「ええ・・・僕、緑色じゃないですか？」
『え？ミッチは紫色だろ！ブドウアームズ！龍砲セイヤッハ』
「途中からキウイになってますよ」

エグゼイドからの依頼内容も含めて色々と意味がわからなかったが、ライダー絡みの案件で最初から意味のわかったことは経験上非常に少ない。基本的にはもう突っ込むだけ無駄だ。何より紘汰からの頼みとあっては、光実は断りたくなかった。この人には、一生を費やしてでも返しきれない恩がある。

「・・・まあ、いいですよ。よくわかりませんが、事情は直接宝生先生に訊いてみます。で、これからどうしたらいいですか？」

『さすがミッチ！助かるぜ！』

紘汰曰く、日程は明日。光実は特に予定もなかったので、それは問題ない。迎えが来るらしいが、時間帯のことは確認が取れ次第メールで伝えるとのことだった。

『マジでサンキューなミッチ！今度そっちで何か奢るわ！』

「え、こっちのお金あるんですか？」

『口座にバイトの貯金がちょっと残ってる！』

終話。歩きながら話していたため、光実はいつの間にか自宅の前に着いていた。

「・・・相変わらずだな、紘汰さん」

紘汰が人間であることを捨てた時。銀色の鎧に包まれて荘厳な雰囲気を醸し出すその姿を見た光実は、ああ、なんだかクールなキャラになってしまわれた、と思ったものだったが。

実際、特にそんなことはなかった。葛葉紘汰は今も昔も、あの闘争の1年にあっても、ずっと・・・お人好しでちょっと間の抜けた、光実の兄貴分であった。

翌日。光実は少し遅めの9：00のアラームで目を覚ました。エグゼイドたちの勤務地である聖都大学付属病院への迎えの車が10時頃に来るとのことだったので、光実は手早く準備を済ませて呉島家の邸宅前で待っていた。

ライダーとして呼ばれているので、光実のリュックの中には戦極ドライバーと手持ちのロックシードが幾つか入っていた。久しぶりに持ち歩くが、やはりフルセットだと重たい。地べたに鞄を降ろして待

機していたところ、ふらふらと歩いてくる兄・貴虎の姿が見えた。
「に、兄さん・・・昨日も泊まり込んだの？」
「ああ、おはよう、光実。これから着替えてまた出勤だ。ははは」
「ははははじゃないよ・・・」
　貴虎の生気の希薄な骨ばった顔の中にあって、瞳だけが煌々と光を放っている。正直不気味であった。明らかに死相が出ている。これから迎えに来るであろう医療関係者に会わせたら、即刻病院へ連行されそうだ。
「光実は外出か？」
「うん、ちょっと聖都大付属病院に行ってくるね」
「具合でも悪いのか？体調管理はしっかりしろよ」
　貴虎はそう言い残すと、ふらふらと邸宅の中へ入っていった。その言葉はそっくりそのまま返したい。
「・・・兄さん、ほんとに大丈夫かなあ」
　前述の通り、紘汰とはまた違ったベクトルで人間離れしている兄ではある。しかし、さすがに最近は働きすぎなのではないか。ただ、きっと・・・今の方が、兄の性分には合っている。
　かつて貴虎は、大企業〝ユグドラシル〟の主任として、人類の６／７を抹殺するプロジェクトを仕切っていた。幼い頃より冷静な体面の下にお人好しな理想論者の心を隠していた兄にとって、その選民的な計画を取り仕切ることは、大きな心的苦痛を伴ったに違いない。当時から激務であることに変わりはないが、現在は先の闘争によって疲弊した沢芽市の復興を目指して働いている。同じように身を粉にして働くにしても、目的の違いによって、貴虎の心は随分と楽になった筈だ。
　見掛けは違っても、貴虎は紘汰とよく似ているのだ。心の中には自分の理想を持っていて、それに届かない現実に迷い苦しみながらも、それぞれのやり方で理想を叶えるための力を手に入れた。ただ真っ直ぐに、近道を考えることなどなく走り続けた兄と兄貴分。合理性と効率を追求するあまり、独り善がりになってしまいがちな自分とは違う。違うからこそかつては否定したかったし、今では尊敬している。

・・・この世界には、ヒーローがたくさんいる。葛葉紘汰こと”鎧武”。呉島貴虎こと”斬月”。これから相見えるエグゼイド、一度だけ一緒に戦った刑事”ドライブ”、あまり詳しく知らない坊主(？)”ゴースト”など。彼らはきっと、紘汰や貴虎寄りの人間だ。理想を強く抱き続け、ひたむきに戦って世界を救ったヒーローだ。

そんな彼らと自分が、同じ”仮面ライダー”として扱われることに、光実は些か疑問を抱いていた。やっぱり自分は、ヒーローなんて気質じゃないから。一度は異世界の蛮族に加担した後ろ暗い過去だってある。紘汰の頼みだからこそエグゼイドの招集に応じたが、果たして自分は、仮面ライダーの名に相応しい人間なのだろうか。・・・と、そんなことを考えていると迎えの車（？）が来た。

正確には車ではなくバイクだった。更に正確に言えば、その黄色いバイクはバイクではなく、そういう仮面ライダーであった。

「あんたが”龍玄”？」

迎えに訪れたのは、世にも珍しい喋るバイク。仮面ライダーレーザーこと、監察医・九条貴利矢であった。

「あ、はい。アーマード・・・仮面ライダー龍玄。呉島光実です」

「自分は九条貴利矢。こんなナリだけど、一応仮面ライダー」

「存じております」

「いやほんと、急な呼び出しですんません。事情は・・・えっと、ちょっと長くなるんで、向こう着いてからで大丈夫っすかね」

「大丈夫ですよ」

ここで長時間こうしていると、通行人からはバイクと喋ってる変な人に見えてしまう。とりあえず光実はリュックを背負ってレーザーの背（？）に跨った。

「はじめまして、光実さん。宝生永夢です」

聖都大学付属病院、電脳救命センター”ＣＲ”。光実を迎え入れた永夢は、笑顔で彼に挨拶をした。

「呉島光実です。はじめまして」

「突然呼び出してしまってすみません。それと、本当にありがとうご

ざいます。紘汰さんからお話は伺ってます。光実さんはすごく頼りになる・・・紫色の仮面ライダーだと」
　光実は苦笑いを浮かべた。貴利矢は光実に着座を促すと、目の前に紫色の液体の注がれたグラスを置いた。
「ブドウジュースっす。好きかなと思って」
「あ、はい、ありがとうございます」
　・・・特別そういうわけでもないんだけどな。
　永夢は話を続けた。
「本来であれば院長の鏡から直接御礼申し上げるべきなんですけど・・・間の悪いことに出張に出てしまっていて。すみません」
「いえ、お気になさらず。それで、今回はどうしたんです？」
「えっと、そうですね・・・先の”仮面ライダークロニクル”に関連することなんですが」
　”仮面ライダークロニクル”。バグスターウイルス感染症が取り沙汰された争乱の時期、その後半にて日本に混乱を巻き起こした、前代未聞のゲームソフトのタイトルである。この現実世界を舞台に、戦士に変身したプレイヤーたちが怪物・バグスターを攻略する・・・という名目で流通したそれは、蓋を開けてみれば残虐極まるデスゲームであった。ライダークロニクルの敗者は”肉体が消滅した状態”となり、エグゼイドたちの活躍によって事件が一応の決着を見せた今でも、消滅者たちの復活は果たされていない。光実の暮らす沢芽市でも、数名の消滅者が出ていた。
「開発者である檀黎斗のアジトより、そのプロトガシャット・・・えっと、つまり試作品が複数見つかったんです。ご存知の通り、ライダークロニクルは極めて危険なゲームです。なので破棄処分を試みたんですが、厄介なことに、無理やり壊すと大量のバグスターウイルスが散布されるような仕組みになってまして」
「それは本当に厄介ですね」
「はい。これら試作品を破棄するには、一度起動して、ゲーム内にいるウイルス感染源・・・つまりボスキャラを倒して無害化する必要があるんです」

わかるようなわからないような説明だったが、目の前にいるのはこの分野の専門家だ。とりあえず専門家がこう言っている以上、そういうものなんだろう。光実は自分自身を納得させた。
「さっきお話したように、試作品は複数ありました。で、その・・・複数あったということの意味なんですけど、光実さんって、ゲームはよくやりますか？」
「僕ですか？いえ・・・」
「そうですか。あの、なんて言うんでしょう・・・ゲームソフトには”バージョン違い”っていう商法があって。基本的には同じゲームなんですけど、細かい部分の仕様を少しだけ変えて、別の商品として発売することがよくあるんです」
「ああ、はい」
ゲームには疎いとはいえ、そのくらいの知識ならある。子供の頃に流行した、モンスターをコレクションして育成するゲームの記憶。赤とか緑とか青でソフトの色が分かれていて、色が違うと作中に登場するモンスターの種類が違う。つまり、一作だけではコンプリートが出来ないようになっており、優れたビジネスモデルである。
「ポケモンみたいな感じですね」
「そうです！え、やってました？ポケモン」
「あ、僕はやったことないんですけど、友達がやってたなって」
少し苦い記憶だった。家庭の方針により、ゲームの類は買い与えてもらえなかったのだ。クラスメイトたちがゲームの話題で盛り上がる中、話に入ることが出来ず寂しい思いをした。
「そうなんですね・・・機会があればやってみてください。子供向けに見えて、大人が本気でやっても楽しいゲームです。大会なんかもありますし。あ、もしよかったら最新作のサブＲＯＭが余ってるので一つお貸ししま痛っ」
「名人。話逸れてるって」
貴利矢が永夢の尻に軽く蹴りを入れ、スイッチの入ってしまった彼を制止した。宝生永夢は、ＣＲのドクターで仮面ライダーであるとともに・・・かつてその界隈で一世を風靡した伝説の天才ゲーマーであっ

たという。ハンドルネームは”M”。ゲームのことになると人格が変わるというが、光実はその片鱗を垣間見た気がした。
「失礼しました・・・話を戻しますね。で、試作品が複数ある理由なんですが」
「檀黎斗は仮面ライダークロニクルに、当初は複数のバージョンを用意していたと」
「その通りです」
　永夢が頷き、テーブルの上にあったジュラルミンを開封した。中には5つのガシャット・・・すなわち、幻夢コーポレーション制のゲームソフトが入っていた。それらは5色に色分けされている。
「これらがその試作品です。左から順に、仮面ライダークロニクル赤バージョン、緑バージョン、青バージョン、黄バージョン、そして・・・問題の紫バージョンです」
「はあ」
「仰る通り、檀黎斗はもともと仮面ライダークロニクルを複数バージョン発売する計画を立てていたようです。押収した手記を読むと、プレイヤーは購入したバージョン別に色分けされた戦士に変身し、同色で纏まってのチーム対抗戦を行うような構想でした。・・・これは光実さんをお招きしたこととは関係がありませんが、沢芽市の”インベスゲーム”から着想を得たようです」
「・・・懐かしいですね」
　インベスゲーム。禁断の果実を巡る闘争の下地となった、かつて沢芽市に存在した特有の文化だ。当時、沢芽市の治安は極端に悪化していた。派閥の異なるダンスチーム同士が、市内のステージで踊る権利を巡って対立。怪物・インベスを召喚して戦わせることによって決着を付ける領土争い。それがインベスゲームである。・・・その後のことを知る今となっては寒気のする異常な文化だったが、当時は無邪気にも熱中したものだった。
　光実の所属していたチーム鎧武は青、ライバルチームのバロンは赤といった具合に、確かにそれは色別のチーム対抗戦のようであった。つまり壇黎斗は、あれを世界全土でやろうとしていたのか。

「また、それぞれのガシャットの中にはお助けキャラである仮面ライダーのデータが複数存在し、プレイヤーはレベルアップによってその力を得て戦うことが可能、というものでした。・・・どのようにしてデータ収集をしたかわかりませんが、過去にこの世界で、果ては並行世界で活躍したとされる歴代ライダーたちを登場させているんです。彼ら歴代ライダーたちは、その”色”によってバージョン分けされています。例えばドライブの”タイプスピード”なら赤、というように」

永夢は話を続ける。

「結果的にはゲームバランスの観点から登場ライダー数を絞ることにしたようで、この案は一旦お蔵入りになってます。後のアップデートでの導入は考えていたらしいですけどね。これら試作品の中には、檀黎斗が収集した歴代ライダーたちのデータを元にしたバグスターが入ってるんです」

「つまり、先程仰ったボスキャラというのは」

「はい。つまり、歴代のライダーたちです。・・・僕たちはこれら試作品の破棄を行うため、敢えてガシャットを起動してゲームエリアへ向かい、攻略を行いました。ここにある５つの試作品のうち、紫バージョンを除く４つの無害化は完了しています」

「名人の担当、酷かったよなあ」

「いや、ほんとに。赤に強いの寄りすぎでしょ。カブトとかディケイドとか冗談かと思いました。データであれなら本物ヤバすぎますよね。そもそもディケイドは赤じゃなくてピンクでしょあれ」

「いや、それ言ったら名人もピンクだけどな」

なんとなく話が見えてきた。光実はＣＲのライダーたちの姿を思い浮かべる。

「つまり、宝生先生は赤。ブレイブは青で、九条先生が黄色。緑は・・・スナイプが攻略したってことですか？」

「そうです！理解が早くて助かります。これら試作品は、檀黎斗基準で、各バージョンに対応した色のライダーでしかプレイ出来ないようになってるんです」

「なるほど」
　そうか。今のＣＲには、紫色の仮面ライダーがいないんだ。それで顔の広い紘汰さんに依頼が入り、僕に声が掛かったと。
　話は大体わかった光実だったが、一つ疑問点があった。
「事情は大体わかりました。・・・ただ、一つお伺いしてもよろしいですか？」
「はい」
「あの、確かに危険な試作品の破棄は行うべきだと思うんですが、・・・昨日の今日でお招き頂いたということは、何か緊急性があるってことですよね？つまり、先延ばしに出来ない理由が」
「・・・そうなんです」
　永夢の表情が曇る。光実は彼の次の言葉を待った。
「解析を進めた結果、新しい事実がわかりました。原因は不明ですが、ガシャット内部で何かが起きていて、このままだとあと1週間ほどで紫バージョンは自壊するようなんです。つまり、放っておけば」
「ガシャット内部のバグスターウイルスが散布される」
「・・はい。檀黎斗の変身した”仮面ライダーゲンム”は、見方によっては紫色のライダーでした。それが何か関係してるのかもしれません」
「前にも一回あったんだよ。あいつは自分が消滅した時に備えて、事前に用意してたガシャットに自分自身のバックアップデータを入れていた」
　貴利矢の言葉に、永夢が頷く。苦い表情をしていた。
「・・・これが、光実さんの力をお借りしたい理由です。お願いしたいのは、仮面ライダークロニクル紫バージョンの無害化。仮面ライダー龍玄として紫バージョンのゲームエリアに向かい、ボスキャラライダーたちを攻略してほしいんです」
　永夢はそこで言葉を一度区切った。
「・・・お返事を頂く前に、伴う危険についてはっきりお話します。仕様上、クロニクルのゲームエリア内で敗北したプレイヤーは・・・つまり、ゲームオーバーになった場合には、肉体が消滅する可能性が非

常に高いです」
　そうだろうな。光実は頷く。
「光実さんはバグスターウイルスの抗体はお持ちでないと思いますが、試作品のゲームエリア内ではウイルスは感染能力を持たないようです。なので、試作品のプレイ中にバグスターウイルス感染症・・・ゲーム病に罹る心配はありません。ただ、プレイ中にガシャットが自壊してしまった場合、光実さんは解き放たれたバグスターウイルスに晒されることになります。その場合、ゲーム病感染のリスクは非常に高いと考えられます」
　永夢は真剣な眼差しで光実を見つめ、言葉を続ける。光実もまた、永夢の目を真正面から見る。・・・水晶のような人だ。光実は、漠然とそんなことを思った。
「いいですよ。僕がやります」
「えっ」
　永夢が驚いた表情を浮かべた。それもそのはず、永夢はまだ、試作品の攻略に伴う”危険”の部分しか話していない。危険への対策についてと、協力に対する対価の話をまだしていなかったからだ。光実はそんな永夢の心中を見抜き、言った。
「ただ、僕の方から1つだけ、お願いしたいことがあるんですけど。ゲームクリアの報酬として」
「はい、僕たちに出来ることなら」
「もし僕が、仮面ライダークロニクル紫バージョンをクリアしたら・・・」
　永夢と貴利矢が少し身構えるのがわかった。・・・ちょっと意地悪な間の取り方をしちゃったかな。光実はそこで笑顔を作ると、出来るだけ声のトーンを明るくして、こう続けた。
「この病院で、僕の兄の健康診断をしてくれませんか?あの人ずっと働きづめで、どこか悪くしてないか心配なんです」
　永夢と貴利矢は予想外のその一言に目を丸くして、その1秒後には笑みをこぼした。
「喜んで」

光実が永夢を信用したのには、大きく分けて3つの理由がある。1つは、永夢がきちんと順序立てて、事態の背景とやるべきことを具体的に説明したこと。これは、いざ頼みごとをする側に立つと、案外見落としてしまいがちな部分なのだ。特に、仮面ライダーには説明が雑な人種が多い。これだけで、光実的にはかなりの好感度アップであった。

2つ目は、永夢がリスクから先に説明をしたこと。永夢の職務から考えて、これは断られてはならない依頼である。そういった交渉の場にあって、話しづらいことから・・・つまり、依頼を断る理由になり得る部分から先に話すというのは、なかなか出来ることではない。

3つ目は・・・光実の好感を買ったこれら2つの要因が、打算や計算によるものではなく、宝生永夢という人間の心から、自然と生まれたものであることが伝わったから。光実の疑り深い人となりを知って、言うことを聞かすために組み立てた会話ではない。自分の頼みを聞けば危険に身を投じることになる光実を慮りながらも、世界に迫る災厄を防ぎたい・・・そんな想いが、光実に伝わったからだ。

以上の理由から、光実は宝生永夢を、信頼に足る”大人”として判断した。今日光実がここに来たのは、紘汰からの頼みごとを断りたくなかったから。その上でもう一度龍玄として戦うことに決めたのは、ライダーとしての光実の判断だった。

「・・・ここまで話しておいてなんですけど、僕、言うほど紫じゃないです。それは大丈夫ですか？」

「・・・それは正直やってみないとどうかわからないんですよね。その確認も含めて、今日一日は準備に充てたいです。ご予定は大丈夫ですか？」

「はい、休み中で暇なので」

こうして、仮面ライダー龍玄・・・呉島光実と、仮面ライダークロニクル紫バージョンとの戦いは幕を開けたのであった。

第2話：答えは聞いてない

「・・・それじゃ、光実さん。くれぐれもお気を付けて」
「はい」
聖都大学付属病院、ＣＲ。光実はドクターたちに囲まれ、右手に持ったブドウロックシードを解錠した。
『ブドウ』
天井に時空の裂け目〝クラック〟が開き、紫色の鎧が姿を現した。光実の上空に浮遊するそれは、彼が腰に巻いた戦極ドライバーのカッティングブレードを操作すると同時に、勢いよく落下する。
「変身」
『ブドウアームズ！龍・砲・ハッハッハ！』
龍玄のライドウェアが光実の全身を包み込み、頭からすっぽりと被ったブドウアームズが展開する。そうして仮面ライダー龍玄は変身を完了し、永夢は龍玄にそのガシャットを手渡した。
仮面ライダークロニクル紫バージョン。龍玄はそれを受け取ると、仮面の内側で深呼吸した。
「呉島さん、よろしくお願いします」
龍玄の前に歩み寄り、頭を下げたのは外科医の鏡飛彩。光実も彼に会釈した。
エグゼイドからの招集により、光実が初めてＣＲを訪れたのが昨日のことだ。依頼を受けることに決めてからは、１日を費やして紫バージョンを攻略するための準備を行った。そして日を改め、光実はいよいよ危険なライダークロニクル試作品の世界へ飛び込もうとしている。
『そうか。頑張れよ、光実』
昨夜、自宅にて事情を説明した際の兄の言葉が蘇る。兄は、貴虎は危険な戦いに赴こうとしている光実を止めはしなかった。それは、無関心や放任によるものではない。１人の男として戦いを選んだ弟の心を尊重したからだ。光実は、もう己の庇護のもとにある存在ではない。それが今の貴虎の考えであり、光実もまた、そのように考えてい

たからこそ独断でエグゼイドの依頼を受けたのだ。
『うん、頑張るよ、兄さん。兄さんは・・・その、大丈夫かい』
『ああ、やはり戦極ドライバーは素晴らしい発明だな』
　昨晩の貴虎は光実が帰宅した頃には家にいたが、自室にて残務と戦っていた。・・・仮面ライダー斬月に変身した状態で。
『変身していると力が漲ってくるのを感じるよ。本来、戦極ドライバーはこのようにエネルギー供給手段として使うものだからな。使い方次第ではビジネスマンの強い味方になるというわけだ』
『そっか。くれぐれもベルトの誤操作には気を付けてね。先月は寝惚けてデスクにメロンスカッシュしちゃったんだから』
『大丈夫だ。今日はガムテープでブレードを固定した』
　光実ははっと我に返る。兄の行く先も心配だが、今は目の前のことに集中しよう。・・・周囲を見渡す。
　永夢と貴利矢、そして昨日は不在だった飛彩に、あと2名・・・協力者であるバグスターたちがいた。
「心が躍るな～、紫バージョン、どのライダーが出てくんだろな」
「パラド。遊びじゃないんだ。お前はしっかり光実さんをアシストするんだぞ」
「わーかってるって、永夢。よろしくな、ミッチ」
「光実さん、でしょ！すみません」
「あ、いえ、ミッチでいいですよ。慣れてますし」
　・・・パラド。宝生永夢に感染したウイルスから生まれたバグスターであり、仮面ライダーエグゼイドの力の根源でもある。自身も仮面ライダー”パラドクス”に変身し、かつては人類の敵として暗躍していた。今はＣＲの協力者であり、今回の紫バージョン攻略戦では光実のアシストを務めることとなった。パラドクス自体は赤と青の仮面ライダーなので、非戦闘キャラとしての同行である。これはバグスターならではの特権であった。
「じゃあ私もミッチって呼んじゃお！ミッチ、本当に気をつけて。こっちからも出来る限りのことはするから」
「ありがとうございます、ポッピーピポッパッ」

「・・・慣れないと、言い辛いですよね」
　見事に噛んだ光実に、飛彩がフォローを入れる。もう1名の奇抜な色合いをした女性型のバグスターは、ポッピーピポパポ。ゲンムコーポレーションの人気ゲーム”ドレミファビート”に登場するキャラクターであり、彼女のことはゲームに疎い光実でも知っていた。かつてチーム鎧武のメンバーで市内のゲームセンターに遊びに行った際、ドレミファビートのアーケード版を舞がプレイしていたからだ。
（しかしあの時の舞さん、美しかったなあ）
　流れる曲のリズムに合わせてボタンを押すという単純極まるゲームであったが、舞がその小さな身体を躍動させて懸命にプレイをする様は、まるで神事を執り行う巫女の如く神々しく光って見えた。・・・否。清々しく弾ける舞の汗によって、現実にそれは光輝いていたのだ。チーム鎧武の面々はそんな舞の姿ではなく画面上のスコアに気を取られており、光実は彼らの正気を疑った。こんなにも尊いものが目の前にあるのに画面ばっか見てるなんて勿体ない、ああでも逆にこれは今僕だけが舞さんを独り占めしてるってことで、つまり、ああ尊い、尊いよ舞さんああっ
「・・・大丈夫っすか？」
「はっ」
　貴利矢に肩を叩かれ、光実は我に返った。いけない。また集中が途切れてしまっていたようだ。
「緊張してます？まあ、無理もないけど。今ポッピーが言ったように、自分らも最大限のアシストはするんで」
「はい、九条先生」
　緊張していたわけではないのだが。光実は改めてもう一度深呼吸をし、昨日教わった通りに・・・ＣＲの面々が見守る中、右手に構えた仮面ライダークロニクル紫バージョンを起動した。
『仮面ライダークロニクル紫バージョン』
　タイトルコールが鳴り響く。これは昨日一度試した際に判明した通り・・・仮面ライダー龍玄は、紫色の仮面ライダーとして認められているようだった。

「じゃあ、行ってきます、皆さん」
「よろしくお願いします、光実さん」
　ＣＲの面々は、龍玄に一礼した。彼らの想いを背負った龍玄の身体は、紫バージョンのゲームエリアへと転送され、ＣＲから姿を消した。
「・・・お気を付けて、光実さん」
「俺は？永夢」
「何してんの！早く行けよパラド」
「冷てーなあ」
　パラドもまたいつも通りにやにやと笑顔を浮かべ、龍玄を追ってゲームエリアへと向かった。

「・・・思ったより普通だな」
　紫バージョンのゲームエリアは、一見すると普通の街のように見えた。知らない街ではあったが、事前に想像していたような光景とは少し違う。ゲーム内とはいえ、もはや檀黎斗制作のそれは異世界の域に達していると聞いた。異世界といえば、もっとこう・・・禍々しい感じを想像していた。ヘルヘイムのせいに違いない。
「お待たせ！ミッチ」
「パラド」
「プレイヤーがいないと入れないからさ、俺も紫バージョンは初めてなんだ。心が躍るなあ」
　パラドは紫バージョンを除く４バージョンの攻略を手伝ったらしく、この試作品群のセオリーをある程度把握していた。とはいえバージョン毎に仕様のばらつきも見られたようで、セオリーを過信するのは危険であったが・・・とりあえず光実は、パラドの意見を聞くこととした。
「で、何から始めればいいものなの？」
「これまでの感じだと、ボスキャラライダーは大体４～５人いる。それぞれが支配してるエリアがあるから、そこに行ってバトルする感じだな。まあでも、大体最初は」
　パラドがそこまで言うと、・・街に、音楽が流れ始めた。大ボリュー

ムのダンスミュージックである。
何事かと周囲を見渡す龍玄。1人、また1人と、人が集まってくる。彼らは音楽に合わせて踊っているようだった。
やがて彼らは龍玄とパラドを囲い、大きなサークルを描く。それだけでも異様な光景だったが、光実は彼らの顔が人間のそれではないことに気付く。・・・バグスターウイルス。かつてゲーム病のパンデミックが発生した際に、街を埋め尽くした感染者たちと同じ顔をしていた。
「早速始まったみたいだぜ、ミッチ。・・・大体最初はな、向こうから来るんだ」
音楽が止まった。その瞬間、龍玄たちを囲んだ群衆はぴったりとダンスを止める。しばしの沈黙が流れた。すると、龍玄たちの正面に位置していた数名が、道を開けるようにして横にずれた。その向こう側から、それが歩いてくるのが見える。
「・・・最初はあいつか」
「まあ確かに、彼は疑いの余地なく紫色だ」
歩いてきたのは、紫色の魔人。それはバグスターウイルスたちの輪に加わると立ち止まり、指をパチンと鳴らした。
再び轟音のダンスミュージックが鳴り響くと、魔人は誰よりもキレのある動きで踊った。ダンス経験者の光実の目から見ても、見事なブレイクダンスであった。・・・感心している場合ではない。
魔人は、それがまるでダンスの振り付けの一部であったように。どこからともなく取り出したベルトを腰に巻くと、そのバックル部分に備えられた4色のボタン・・・最も下段に構える、紫色のボタンを押した。
流れるミュージックとはまた異なる軽快なメロディが、彼のベルトから鳴り響く。2つの異なるメロディ、そしてリズムはその盛り上がりの頂点で交錯し、魔人はその一言を放った。
「変身」
『ガンフォーム』
魔人の名は、リュウタロス。流れる時間の”特異点”、野上良太郎

に憑依したイマジンの1人であり、良太郎の持つ龍のイメージが具現化した存在である。彼が変身するのは、誰が見ても納得の”紫色”の仮面ライダー・・・仮面ライダー電王・ガンフォームである。

「お前、倒すけどいいよね」

そう言うと、ガンフォームは軽快なステップを踏み、腰部の武装”デンガッシャー”を銃の形に組み立てる。

「・・・ミッチ、あの質問は答えるだけ無駄だからな」

「わかってるよ。有名だし」

ガンフォームはデンガッシャーの銃口を龍玄に向けると、有名なその決め台詞（？）を放った。

「答えは聞いてない！」

第３話：ｉｍａｇｉｎｅのライダー！

「答えは聞いてない！」
　ガンフォームはそう言うや否や、右手に構えたデンガッシャーの引き金を何度も何度も引いた。
　・・・仮面ライダークロニクル紫バージョン。最初の敵は、仮面ライダー電王・ガンフォーム。本来はイマジンであるリュウタロスが野上良太郎に憑依することで変身する電王のフォームチェンジ形態の１つであるが、良太郎が戦いを終えた後は、リュウタロス自身が直接ガンフォームに変身する形で戦いを続けている。時の運行を乱す悪を討つ戦士であるが、・・・彼は、野上良太郎に憑依したイマジンの中でも、一番の問題児であったと聞く。
「いえーい！」
「危ねっ！危ねえって！」
　ガンフォームが嬌声を上げながら放つ弾丸は、無軌道に龍玄たちを襲った。龍玄とパラドはステップを踏んでそれを回避する。パラドが非戦闘キャラであることなど、ガンフォームにはお構いなしのようだった。射撃の精度そのものは低い。まるで命中させることを放棄しているようだったが・・・だからこそ、弾の軌道が読めなくて厄介だ。
「パラド、入って！」
「そうする！」
　龍玄は、右腕に装着した〝バグヴァイザー〟をパラドに向けた。パラドの身体は粒子に変わり、その中に吸い込まれてゆく。
　このバグヴァイザーは、ＣＲから借り受けた装備の１つであった。ゲーマドライバーで変身していない光実は、本来であればバグスター化したボスキャラライダーたちにダメージを与えることは出来ない。しかしパラドのデータを入れたこのバグヴァイザーを装備してさえいれば、龍玄の攻撃はボスキャラライダーたちに届くようになる。
「とりあえず準備はＯＫか」
　ガンフォームの放つ弾丸の嵐を掻い潜りながら、龍玄は自身の愛

銃・・・”ブドウ龍砲”を手に取る。
自身も銃の使い手なので、その利点と欠点はよく理解しているつもりだ。問題は、そのどちらを勝負のステージとするか。つまり・・・接近戦に持ち込むか否かだ。
『ミッチ、どうする?』
「・・・考え中」
バグヴァイザーの中から、パラドの声が聴こえてくる。この状態で会話が出来るのは便利だ。
龍玄は回避行動の合間を縫って、狙いを澄ました射撃をガンフォームに向けた。しかし、くるくると踊るように動き回るガンフォームを捉えることが出来ない。そうしているうちに次の弾丸が龍玄を襲い、また回避の必要が出る。
「くっ!」
龍玄の鎧に火花が走る。1発、受けてしまった。龍玄は体制を崩してしまい、また次の銃弾が迫る。咄嗟にサイドステップでそれを躱そうとしたが、・・・避けた先に弾丸が来た。くそ、読めない。
・・・昨日の仮面ライダークロニクル紫バージョン対策会にて。永夢は、光実に”攻略本”を手渡した。
『これは、僕とパラドで作ったものですが・・・紫バージョンに登場する可能性の高いライダーたちについての情報を纏めてあります。檀黎斗が収集したデータを基に作ったので、ある程度の信憑性はあると思います』
電王ガンフォームは、その攻略本の中に記載があった。攻略本によるとガンフォームの弱点は、
・お姉ちゃん
とのことであった。
実際の変身者・リュウタロスは、”お姉ちゃん”に異様な執着を示すらしく、２００７年当時の戦いでも、お姉ちゃんが絡んだ際には冷静を失ってピンチに陥ることが多かったようである。
・・・つまりどういうことだよ!
昨日の時点でこの突っ込みを入れなかった自分を殴りたくなった

が、他のもっとヤバそうなライダーたちの対策を考えるので忙しかったのだ。お姉ちゃんってなんだ。多分それはライダーとしての弱点というよりも、リュウタロスの個人的な性癖に類するものだと思う。

『ミッチ！電王ガンフォームの弱点はお姉ちゃんだ』

「だからどういうことだよそれ！」

龍玄は態勢を立て直し、反撃の銃弾をガンフォームに叩き込む。命中した。この隙を逃すわけにはいかない！

龍玄は・・・とりあえず接近戦を挑むことにした。電王の他フォームは、それぞれ剣、杖（？）、斧を武器とする。つまり接近戦に於いては、それらのフォームが選択されることが多かったのではないか？多数フォームを備えたライダー最大の利点は、相対する敵や状況に応じてバトルスタイルを変えられること。中でも電王は、変身者の人格ごとチェンジする。つまりリュウタロスは、接近戦の経験が少ないのではないか。

最初から距離はそこまで離れていない。龍玄は大地を蹴って一気にガンフォームに肉薄すると、装甲の薄い首元を狙って手刀を放つが・・・危険を察知したガンフォームはくるっとターン。そのままブレイクダンスの要領で高速回転し、龍玄に後ろ回し蹴りを直撃させた。

痛い！それは龍玄の仮面の右頬の部分にクリーンヒットし、龍玄はそのまま横薙ぎに吹き飛ばされた。ガンフォームは倒れた龍玄に容赦なく射撃を叩き込む。ブドウアームズに命中する分はまだマシだが、鎧に守られていないライドウェア部分に当たるとまあ痛い。ガンフォームは相変わらずの嬌声を上げながら、狂ったように引き金を引き続けた。

「それそれー！」

・・・こいつ、ヤバいやつだ。光実は戦慄する。

『これまでの傾向を見ると、檀黎斗が再現したボスキャラライダーたちは・・・誇張されてるんです』

光実は、昨日の永夢の言葉を思い出す。

『誇張？』
『ゲームのキャラクターとして落とし込むために、その特徴が誇張されてるようなんですよ。その能力も、人格も。ライダーといえど、大体は人間です。色んな一面がありますよね？』
『それはまあ・・・そうですね』
　光実は、自分の胸に手を当てて考えた。確かに。
『ボスキャラライダーたちは姿形こそ現実の彼らに限りなく近いものですが、基本的には〝そのライダーについての最も普遍的なイメージ〟を基に構成された、別物です。最も目立つ一面だけを切り取っている。例えば、赤バージョンで僕が相手にした仮面ライダーカブト。・・・一度実際にお会いしたことがあるんですが、変身者の天道さんは、俺様系に見えて非常に思いやりの深い人物でした。ただ、僕が戦ったボスキャラライダーとしてのカブトは、まさに傲岸不遜な俺様キャラで、一切の容赦のない冷徹な戦士でした。つまり、極端なデフォルメがされてるんですよ』
　それに当て嵌めて考える。・・・つまり、目の前にいる電王ガンフォームは、光実がリュウタロスに対して事前に抱いていたような印象・・・つまり、〝話の通じないトリガーハッピー〟というイメージが具現化した存在というわけだ。それは非常にタチが悪い。
　とにかく、リュウタロスは接近戦も出来るタイプらしい。・・・考えてみれば、あのダンス技術だ。身体能力が低いわけがない。接近戦は愚策だったか。なんとかして距離を取りたい。龍玄はブドウ龍砲で撹乱の射撃を行いながら、今度は後方へ。ガンフォームは距離を詰めてくることはなく、ただデンガッシャーから放たれる銃撃が龍玄を追ってくるようだった。
『ミッチ、どうするんだ？』
「距離を取る。・・・僕と電王との間に遮蔽物がある状況を作りたい。真っ向からやるには危険すぎる」
　いつの間にか、リュウタロスの前に現れたバグスターウイルスのダンサーたちは姿を消していた。ただの演出であったようだ。・・・もしかしてこいつらも敵なのかと思っていたので、そうでなかったこと

は正直ありがたい。あくまでもゲームはライダーとの一騎打ちということか？

「ねえ、逃げるの？」

ガンフォームが、デンガッシャーをメガホンに見立てたようなジェスチャーで大声を出す。話しかけられているようだが、どうせ答えるだけ無駄だ。

「・・・逃がさないけど！」

バンバンと引き金を引きながら走って追いかけてくるガンフォーム。改めて、この手の仮面ライダーは敵にすると非常に怖い。特に電王は恐ろしい相手だ。イマジンたちは揃って好戦的だし、ともするとふざけているような素振りで本気の攻撃を仕掛けてくる。今回の相手はリュウタロス1人だが、実際の電王を敵に回した者は、これが4人組で襲ってくるのだ。とても恐ろしいことである。

ここに来るや否や戦いが始まってしまったので、検証が出来ていない部分が多かった。例えば、このゲームエリア内で他のロックシードの使用は可能なのか。・・・永夢から聞いた仕様だと、恐らくアームズチェンジは不可能だ。では、ロックビークルの召喚はどうか？

充分な間を取ることが出来れば使用を試みたいところではあるのだが、今それをやっている暇はない。とりあえずは戦いやすいフィールドへの移動を優先する。土地勘のない街ではあったが、なんとなくの雰囲気でわかる。・・・駐車場がベストだ。程よく遮蔽物があり、横に広い空間。龍玄は、駐車場を探して逃げ回っていた。

・・・見付けた。大きめの施設に付随した駐車場に、龍玄は飛び込む。場内には何台もの自動車が駐車されており、龍玄は姿勢を低くして身を隠しながら走った。遮蔽物になりそうな大きめの柱も複数見られる。このフィールドなら、身を隠しながら射撃を行うことでアドバンテージが得られそうだ。先ほどの肉弾戦の結果を見るに、恐らく身体能力ではガンフォームに勝てない。となれば・・・銃使いとしての利点。遠距離攻撃のステージで勝負するしかない。

「あれ？・・・ねーえ、どこ隠れてんのー？」

ガンフォームの声が駐車場内に木霊する。龍玄の姿を見失ったらしい。好都合だ。自動車の陰に身を隠した龍玄は物音を立てないよう慎重に、ガンフォームの動向を伺う。光実は、ガンフォームの立てる音でその位置と動きを把握しようとした。

「・・・つまんないの。まあ、いっか」

・・・あれ、もしかして、逃げ切れてしまったパターンか？

話に聞くリュウタロスは、かなり気まぐれな性格だ。気分良く戦っていたところ敵に逃げられてしまい、その姿を見失った・・・となれば、戦いに飽いて帰ってしまう可能性も考えられる。

どうだろう。もしこのまま隠れてやり過ごせるのであれば、無理にここで決着を付けなくてもいいのかもしれない。ゲームエリア内で検証したいことは幾つかあるし、とりあえずボスキャラライダーの1人が電王ガンフォームであることはわかった。交戦し、注意すべきポイントも何点か把握した。となればここは一旦戦闘を打ち切り、然るべき対策を立ててから再戦を、

『フルチャージ』

今、すごく不吉な音声が聞こえたぞ。

『光実、なんか、すごくヤバい気配がするんだけど・・・』

パラドが声を潜めて言う。そうだね。必殺技が来るね。

「全部吹き飛ばしちゃえば関係ないし」

リュウタロスがそう続けた次の瞬間、電王ガンフォームの必殺技・・フルチャージ〟ワイルドショット〟が駐車場内で発動した。巨大なエネルギー弾は、何台もの乗用車を巻き込んで爆炎を巻き起こす。直撃は免れたものの、龍玄はその風圧に吹き飛ばされた。吹き飛ばされている最中、龍玄は・・・立ち込める炎の向こう側で、ご機嫌にステップを踏むガンフォームの姿を見た。

さっそくヤバいぞ、これ。

第４話：炸裂！必殺のブドウスパーキング

さっそくヤバいぞ、これ。

吹き飛ばされた龍玄はそのまま転がり、炎の向こう側に立つガンフォームはその姿を捉えた。龍玄は急いで態勢を立て直し、・・・一度休戦を意識してしまった頭を、再び戦闘へと切り替えて思考する。

「見っけ！」

龍玄の姿を認めたガンフォームは、デンガッシャーの引き金を引く。横転してそれを回避した龍玄は、カウンターの射撃を放つ。しかし、狙いが甘くその弾丸は空を切った。その間にも、ガンフォームは軽快なステップで距離を詰めてくる。・・・どうするか。

『ミッチ、見ろ！』

パラドがそう言うと、龍玄の視界に矢印が現れた。パラドの干渉によるものか？便利なものだ。

「あれは・・・」

『エナジーアイテムだ！あいつが壊した車の中にあったんだな』

パラドが龍玄の視界に出現させた矢印は、先刻のフルチャージでガンフォームが破壊した車の中に光る、灰色のアイコンのようなものを指し示していた。エナジーアイテム・・・ゲームエリア内に出現し、取得したプレイヤーに一時的な強化を施すアイテムだ。

『あのマークは、』

「”鋼鉄化！”」

『正解！』

光実は昨日の対策会で、ライダークロニクルに登場するエナジーアイテムの絵柄を全て暗記していた。素早くエナジーアイテムに照準を合わせると、ブドウ龍砲の弾丸でそれを打ち抜く。

『鋼鉄化！』

アイテムゲット成功を示す音声が鳴り響くと、龍玄のボディは、その堅牢な鎧の上から更に硬く、強くコーティングされる。

「あっ！ずるーい！」

鋼鉄化した龍玄を見たガンフォームが、子供のように地団駄を踏ん

で悔しがる。エナジーアイテムには時間制限がある。この好機をどう活かすか・・・ここまで防戦一方だ。こいつを倒すには、ここで攻勢に転じるしかない！

龍玄は鋼鉄化した身体で、ガンフォームにタックルを決めた。手応えを感じる。よろけたガンフォームに左手で掌底を叩き込み、次いで右手のブドウ龍砲で殴打。そのまま膝蹴りを一発・・・

「痛いなあっ！」

ガンフォームはそこで身体を身軽に翻し、龍玄の背後を取って羽交い締めにした。側から見ると銀色の像におんぶされているように見えるだろう。さすが中身は怪人、意外と腕力があって振りほどけない。身動きが取れなくなった龍玄は、鋼鉄化のタイムリミットが迫っているのを感じた。

『ミッチ！ガンフォームの弱点は、』

「だからそれは知ってるよ！お姉ちゃんだろ?!」

・・・鋼鉄化が切れてしまった。ヤバい！光実がそう思った瞬間、身体がいきなり軽くなった。ガンフォームによる拘束が解かれたことを光実が悟ったのは、一瞬遅れてのことだった。

「お姉ちゃん?」

予期せぬタイミングで拘束が解かれたことにより、龍玄は前方につんのめって転がった。焦って振り向いたが、意外にも追撃はなく・・・ガンフォームは、子供のような声で龍玄に問いかけた。

「お姉ちゃんがどうしたの?」

「え?」

「今、お姉ちゃんって言ったよね?」

・・・どう答えたものか。光実は直感していた。どう返すかが重要だ。こいつ、今は真剣に答えを訊いてるぞ。

一方、ＣＲ。

「ミッチとパラド、大丈夫かな」

ポッピーが心配そうな面持ちで言う。永夢は同様の表情を浮かべ、それに応じた。

「きっと大丈夫。・・・光実さんは、あの沢芽市の戦いを経験した仮面ライダーだ。対ライダー戦の経験は僕たち以上のベテランだよ」
「そうだけど、やっぱり心配だよ」
　その時、室内の電話が鳴り響いた。電話機の近くにいた飛彩がそれを取る。
「はい、こちら電脳救命センター。・・・あ、はい、お世話になっております。はい。ええ、こちらこそ・・・ありがとうございます。はい。今、宝生に代わりますね。少々お待ちください」
　飛彩は電話を保留にし、手招きで永夢を呼び寄せると、受話器を手渡した。
「電話だ」
「誰からですか？」
「呉島さんのご兄弟から。・・・呉島貴虎さんだ」
「えっ」
　呉島貴虎・・・仮面ライダー斬月。永夢は一度咳払いをして声色を整えると、受話器を耳に当てて通話ボタンを押した。
「お電話代わりました。電脳救命センター、宝生です」
『お世話になっております。呉島光実の兄の貴虎です』
「こちらこそ、お世話になっております。すみません、この度は光実さんに急な依頼を・・・」
　・・・永夢は貴虎と直接言葉を交わすのは初めてであったが、彼の変身する斬月の強さについてはよく知っていた。話に聞く沢芽市での戦いと、花家大我が苦渋の表情を浮かべて語った体験談がその情報源である。
『斬月な。ありゃめちゃくちゃだ。ＨＰ高すぎんだろ。その上第２形態まであるんだぜ』
　というのも、・・・斬月は、大我のプレイした仮面ライダークロニクル緑バージョンに、ボスキャラライダーとして登場していたのだ。大我曰く、斬月は極めて高い戦闘技能を持つ上に異様な耐久力を持ち、その攻撃には一切の容赦がない。一度倒してもベルトを付け替えて弓を使う姿〝斬月・真〟への強化変身を行うという。それに対抗すべ

く、大我は自身の奥の手である仮面ライダークロノスへの強化変身を使わざるを得なかった。
『時間止めてもな、ＨＰ高いのはどうにもなんねーんだよ。マジでしんどかったわ』
・・クロノスは”ポーズ”という時間停止能力を持つ仮面ライダークロニクル最強格のライダーであり、大我が変身するクロノスは時間制限付きの不完全版ではあるものの、その力を以ってしても相当な苦戦を強いられたという斬月の強さは、ＣＲの面々の脳裏に深く刻み込まれていた。・・・上記の理由により、永夢の頭の中に”弟の光実を危険に晒したことによって激怒した仮面ライダー斬月”の姿が浮かび、緊張を与えたのも無理はない。大我が相手にしたのはあくまでも誇張された再現版であり貴虎本人ではないと、頭でわかってはいるのだが。
　しかし、電話口の貴虎の声は、至って穏やかなものであった。
『光実は・・・もう行きましたか？』
「はい。あの、光実さんからお話は・・・」
『ええ、伺っております。此度のことはバグスターウイルスに関する大事であり、現状、弟にしか出来ないことであると』
「そうなんです。光実さんにお引き受け頂き、本当に感謝しています」
『いえ、こちらこそです。・・ご存知だとは思いますが、私たち兄弟は、一度は人の道を踏み外した身です』
　貴虎の言う通り、永夢もそれを知っていた。先の沢芽市の闘争の中で、貴虎は人類の６／７を間引くプロジェクトを取り仕切っていた。そして光実は、異世界の怪人”オーバーロード”に加担し、鎧武をはじめとする沢芽市のライダーたちに牙を剥いた。
『それにも関わらず、弟を信頼してこのような大事な仕事を任せて頂いたことを、ありがたく思います。弟は・・・自分にしか出来ないことを、ずっと探しているようでしたから』
　貴虎が言うところの、彼らが”人の道を踏み外した”理由を永夢は知らない。しかし、実際に会って話をした今の光実と、電話越しにではあるが思慮深さの伝わる今の貴虎からは、一片の悪意も感じ取れな

かった。ライダーとしての先輩・紘汰からの紹介だということもあるが・・・過去がどうあれ、この人なら大丈夫だと判断したからこそ、永夢は光実に紫バージョンの攻略を依頼することとしたのだ。
「こちらこそ、感謝してもしきれません。・・・すみません、光実さんを消滅の危険に晒すことになります。それはゲーム病のドクターとして、あってはならないことではありますが・・・僕は仮面ライダーとして、光実さんを信頼しています」
『いえ、いずれにせよライダーは命懸けですからね。お忙しいところすみませんでした。最後に、至らぬところの多い弟ではありますが・・・光実を、よろしくお願い致します』
「とんでもないです。こちらこそよろしくお願いします!あ、光実さんから聞いてますか?健康診断のお話」
『健康診断ですか?』
・・・貴虎の虚を衝かれたような口ぶりから、永夢は察した。いけない、きっとサプライズにしてるんだな。
「あ、いえ、なんでもありません」
『そうですか。それでは、失礼致します』
「はい。失礼致します」
終話。緊張の解けた永夢は一度深呼吸をした。ポッピーが永夢に駆け寄る。
「ミッチのお兄さん、なんて言ってた?」
「光実さんをよろしく、って。・・・なんか良いですね、兄弟って」
永夢は、光実の戦う姿を思い浮かべた。きっと大丈夫。龍玄は、沢芽市の戦いを生きた仮面ライダーであると同時に、仮面ライダー斬月の弟。その強さに、疑いの余地はない。

「ねえ、お姉ちゃんがどうしたの?」
光実は考えた。ガンフォームの弱点はお姉ちゃん・・・その意味を考えろ。光実はイメージを膨らませる。
お姉ちゃんに執着を抱くというリュウタロス。それだけ聞くと、当然行き着く帰結・・・リュウタロスには、姉がいるのではないか?イ

マジンは怪人のような見た目をしているが、その正体は未来人の精神体であると聞く。つまり、元は普通の人間なのだ。姉がいたとして不思議はない。

姉。真っ先に思い浮かぶのは、紘汰の姉である葛葉晶。優しくも厳しい人で、かつての紘汰はしばしば姉の小言についての愚痴をこぼしていた。紘汰は姉に叱責されることを恐れてもいた。

自身の経験にも当て嵌める。兄、貴虎。今でこそ兄弟間のわだかまりは解消されたが、主に生活態度について”呉島の男として”の振る舞いを自身に求めた兄を光実は時として疎ましく思い、同時に恐れたものだった。

・・・これで合ってるかはわからない。ただ、もしリュウタロスにこの手の攻撃が効くとしたら。永夢たちの攻略本と、自身の閃きに賭けてみよう。龍玄は立ち上がると、ガンフォームに向けてこう言った。

「・・・お姉ちゃんがね、喧嘩しちゃダメだって」

「お姉ちゃんが？そう言ったの？」

光実の想定はこうだ。リュウタロスには比較的厳しめの姉がいて、彼はその振る舞いについてしばしば叱責を受けていた。リュウタロスはそれを恐れており、その上でちょっとシスコン気味。だから、電王ガンフォームの弱点は”お姉ちゃん”なのだ。目の前にいる”誇張された”リュウタロスは明らかに危険人物だったが、・・・子供っぽさが目立つ。姉を話に出すことにより、目の前の戦闘からリュウタロスの思考を逸らすのだ。

結論から言うと、その想定は実際のところとは違っていた。リュウタロスの言うところのお姉ちゃんとは彼が憑依した野上良太郎の姉・野上愛理のことであり、愛理は光実の考える厳しめの姉とは真逆の天然系の人物である。リュウタロスは愛理に一方的な好意を抱いており、お姉ちゃんと呼んで慕っていた。

このように光実の想定そのものは間違っていたものの、この場に於いて彼が可能な限り最大公約数的な言い回しになるよう選んだ言葉は、リュウタロスにとって、愛理が口にしても不自然ではない内容で

はあったのだ。
「そうそう。喧嘩したらお姉ちゃん怒るって言ってたよ」
「ほんとに？」
　光実は、子供に語り掛けるようなトーンで言葉を続けながら、そろりそろりとガンフォームから距離を取る。・・・リュウタロスの不安そうな様子を見るに、どうやら効いているぞ。
「ほんとほんと。だから喧嘩はやめよう、ね、リュウタロス」
「・・・うん、」
　光実は、ガンフォームに気取られぬよう慎重に、左手を戦極ドライバーのカッティングブレードに添える。・・・こういう手は、もうあんまり使いたくないんだけどなあ。背に腹は代えられないか。
「わかった。お姉ちゃんがダメって言うなら、僕、喧嘩はやめ」
『ブドウスパーキング！』
「喰らえぇーっ！」
　龍玄はブレードを素早く3回倒し、右手のブドウ龍砲にエネルギーをチャージした。動きを止めて武器を下ろしていたガンフォームが危険を悟る頃には・・・巨大な龍のようなオーラを纏ったエネルギー弾が、ガンフォームの装甲を撃ち抜いていた。
『・・・ミッチ、それはちょっとずるくないか？』
「・・・勝てばいいんだ。勝てば」
　龍玄ブドウアームズの必殺技。ブドウスパーキング”ドラゴンショット”のクリティカルヒットを受けたガンフォームの身体からはエネルギーが抜け、変身が解除された。パラドはバグヴァイザーのディスプレイの中で苦笑いを浮かべている。
「う、嘘つき・・・」
　変身を解かれて仰向けに倒れたリュウタロスは、力なく龍玄を指差してそう言うと、気を失ったようだった。光実は返す言葉が見当たらなかったので、心の中でだけ一度、ごめんねと言った。
　ともあれ、仮面ライダークロニクル紫バージョン、最初の戦いは仮面ライダー龍玄が制した。沢芽市でのライダーバトルに於いて、光実が最も得意としたのは”騙し討ち”。皮肉なことに、過去の行いを反

省した彼が封印しようとしている、最大の武器が活かされた形となった。

第５話：神の模造品は何を思うのか

『・・・まあ、とにかく第1ステージクリアだな、ミッチ！』

パラドはそう言うとバグヴァイザーの中から姿を現し、龍玄の肩を叩いた。それを受けた龍玄も肩を撫で下ろす。気絶したリュウタロスの身体が光の粒子に分解されてゆく様を見て、龍玄はパラドに問い掛けた。

「パラド、倒したライダーはどうなる？」

「ん？ああ、見てな」

粒子となったリュウタロスは・・・電王ガンフォームのイラストの描かれたメダル、つまりエナジーアイテムへと姿を変えて光実の前に浮遊した。光実は納得する。

「なるほど。・・・これをボス全員分集めたらゲームクリア、ってことか」

「そういうこと。ほら、早く取っちゃえよ」

龍玄がガンフォームのエナジーアイテムに手を触れさせると、それは紫色の光を放ちながら龍玄のバグヴァイザーに吸い込まれた。

『仮面ライダー電王・ガンフォーム』

アイテムゲットを知らせる音声が鳴り響いた。とりあえず戦いは終わったので、光実は変身を解除したかったが、ある疑問が頭に浮かぶ。

「パラド、プレイ中に変身って解いても大丈夫？」

「ん？ああ、大丈夫だ。それより早くアイテム確認しようぜ！」

「うん、ちょっと待ってね。・・・ふう」

龍玄は戦極ドライバーからブドウロックシードを取り外し、光実の姿に戻る。それにしても、初戦から随分とひやひやさせられた。着込んでいた鎧の下の衣服が汗で湿っているのがわかり、光実は着替えを持参しなかったことを後悔した。

「パラド、これはどんなアイテムなの？ていうか、今発動するわけじゃないの？」

光実は右腕を持ち上げ、バグヴァイザーの画面部分をパラドに見せ

る。パラドがそれを操作し、画面上に先ほど取得したガンフォームのエナジーアイテムを表示させた。パラドは興味津々でバグヴァイザーを覗き込んでふむふむ言っていたが、光実には見方がよくわからない。
「ライダーのエナジーアイテムは、取得したら好きなタイミングで効果を発動することが出来るんだ。で、こいつは・・・召喚の効果を持ってる。一定時間、電王ガンフォームを呼び出して仲間に出来るってことだな。消費アイテムとしての使用可能回数は2回までみたいだ」
「2回使ったら消えるってこと？」
「いや、消えはしない。ただ召喚の機能がなくなる」
　あの勝ち方だ。呼び出したとて味方してくれるものだろうか？光実は少し不安を覚えながらも、パラドに礼を言って右腕を下ろした。
「経験上、アイテムはガンガン使った方がいいぜ。エリクサー症候群って知ってるか？ミッチ」
「何それ？」
「貴重なアイテムも、出し惜しみしてるだけじゃ宝の持ち腐れってこと。なんとなく、ミッチはそんな感じがするからさ」
　・・・あまりピンと来なかったが、素直に聞いておこう。天才ゲーマーの言うことだ。
「わかったよ。肝に銘じておく」
「おう。じゃあ、俺はちょっと永夢に報告を・・・」
　そこまで言ったパラドの表情が、突如として固まった。光実はパラドの異変に気が付くと、彼の視線の先・・・つまり、自身の背後を振り返って見る。
　そこには、光実もよく知るその仮面ライダーが立っていた。いや、今のこの国に於いて・・・彼を知らない者などいない。彼はまるで最初からそこにいたかのように足音もなく現れ、光実たちを見つめていた。
　少なくとも今の光実を含むＣＲ関係者の中で、その姿を見て身構えない者はいない。その男の過去の所業も理由の一つだが、・・・人間の常識に当て嵌めて考えれば、このように存在していること自体がおか

しいからだ。必然、彼は人間の常識を超えていることになる。
彼は、自身を〝神〟と標榜した。ある意味に於いてそれは間違っていない。神とは、もたらす者。彼はこの世界に様々なものをもたらした。それは彼の考案した様々なゲームやそのキャラクターたちであったり、世界を救ったCRの仮面ライダーの技術であったり、・・・そもそも世界を脅威に陥れた災厄であったり。そして、今光実の立つこの世界もまた。彼の手により生み出されたものであった。

「・・・いるじゃないか。プレイヤーが」

仮面越しに笑顔が伝わるような声色で、彼はそう言った。

「ゲンム・・・!」

「檀黎斗」

・・・パラドと光実はその名を呼ぶ。仮面ライダーゲンム、檀黎斗。バグスターウイルスに関する全ての事件の元凶であり、仮面ライダーレーザーとの死闘の末、消滅したとされる男。彼もまた、・・・その身体に紫色を刻む、仮面ライダーである。

「一向にガシャットが起動されないものだから、この試作品はお蔵入りになったものだとばかり思っていたが。・・・仮面ライダー龍玄、呉島光実くん。まずはプレイしてくれてありがとう、そして」

光実たちの緊張をよそに、ゲンムは明るい調子で手を叩いた。拍手をしている。

「第1ステージ、クリアおめでとう。少々搦め手ではあったが、変身者の弱点を衝いた素晴らしいプレイだったよ」

「ゲンム、今度は何を企んでる?」

ゲンムの言葉の一切を無視して、パラドが食って掛かる。警戒を解いてはならない相手だ。相手は変身もしている。光実はパラドに目配せをし、先ほどドライバーから外したばかりのブドウロックシードを手に取った。

「勘違いしないでくれよ、パラド。オリジナルの私が何をしたかは知

らないが、今ここにいる私はただのゲームのキャラクターさ」
「オリジナルが何かやらかすのはわかってるんだな」
「まあね。私自身のことでもある。大体はわかるさ。光実くんも、そんなに警戒しなくていいよ」
　光実くん。その呼び方といい、芝居掛かった喋り口調といい、光実は檀黎斗に戦極凌馬を重ねて見ていた。それは仮面ライダーのベルト開発者である狂人、という事前のイメージも手伝ってのことだったかもはしれないが・・・つまり、好感は持てない。
「さっきも言ったが、私はこのパープルクロニクルのキャラクターだ。厳密に言えば、隠しキャラ。いわゆる裏ボスさ。つまり、私の存在はゲームクリアには影響しない。戦うつもりはないから安心してくれ」
「・・・どうだかな」
　パラドが吐き捨てるように言う。話によると、檀黎斗はＣＲを何度も裏切った大嘘つきである。パラドの態度も無理からぬところだ。
「随分信用がないな。まあ、構わない」
　ゲンムはそこで一呼吸置くと、少し声のトーンを落として続けた。
「クリエイターにとって、最も悲しいことは何だと思う?・・・作品が誰の目にも触れないまま埋もれてゆくことさ。だから光実くん、君がこのゲームをプレイしてくれて本当に嬉しいよ」
「それはどうも。ところで、このガシャットは自壊を進めているようです。何か知ってることはありませんか」
　光実は、あくまでも冷静に目の前の男から情報を得ようとする。あっさりと本当のところを口にするとも思えなかったが、目の前のゲンムが檀黎斗の再現キャラクターであるとしたら、このゲームのことはそれこそ神のように把握しているはずだ。問いを受けたゲンムは、くるりとターンして光実たちに背を向ける。
「ネタバレはしない主義でね」
　・・・そこで半身を逸らしてゆらりと振り向くと、ゲンムは低い声でこう続けた。
「ゲームを進めたまえ、仮面ライダー龍玄。答えはその先にある」
　ゲンムはそう言うが早いが、どこからともなく現れたサイケデリッ

クな色彩の自転車に跨り、ペダルを高速で漕いで駐車場から出て行った。やけに速い。ゲンムの発する高笑いは瞬く間に遠ざかってゆく。
「あっ待て！追うぞミッチ。あいつをボコって情報を吐かせよう。見た感じレベル0だから多分大したことないぞ」
「それには賛成だけど、ちょっと待ってパラド。・・・使ってみよう」
光実は、腰に下げたロックシードのうちの1つ・・・ロックビークル”ローズアタッカー”を手に取って解錠した。使えるかどうかはやってみるまでわからなかったが、その赤いロックシードは巨大なバイクへと変形し、光実の前に現れた。よし、これは使えるみたいだ。
「なんだそれ！心が躍るな！」
真紅のバイク・ローズアタッカーを見たパラドはその変形ギミックに男心をくすぐられたようで、何やら嬉しそうだった。
「行くよ、パラド！」
「ああ！」
光実は右腕を振ってパラドをバグヴァイザーの中に吸い込むと、急いでローズアタッカーに跨り、・・・遠ざかる高笑いを追って走り出した。

自転車（パラド曰く”スポーツゲーマ”と呼ぶらしい）に乗ったゲンムは妙に速く、ローズアタッカーでもなかなか追い付くことが出来ない。ただ、速度そのものは流石にバイクであるローズアタッカーの方がありそうだ。直線の道路が長く続けば追い付けそうなものだが・・・ここでも土地勘がないことが不利に働いている。歩道と車道の区別なく縦横無尽に街を駆け抜けてゆくゲンムを追い掛けるのは、かなり骨が折れる。
『永夢、聴こえるか。ミッチが第1ステージをクリアした。相手は電王のガンフォームだ。・・・で、そのあと早速ゲンムのお出ましだ。逃げたから今追い掛けてる。また連絡する』
パラドはバグヴァイザーの中で意識を集中し、宿主である永夢の心に直接語り掛けていた。彼らの精神は深い場所で繋がっており、身体の距離が遠くにある際にはこのテレパシーのような方法で連絡を取

る。
　もうかなりの距離を走っているが、ゲンムは一向にバテる様子はない。高笑いも健在である。どんな体力してるんだ。しかし・・・光実は、ゲンムが高速道路に入ってゆくのを見て勝算を得た。直線であれば追い付ける。
　光実を乗せたローズアタッカーもまた高速道路に突入する。アクセルを回し、より速度を上げる。不便なことにローズアタッカーは速度を上げすぎるとヘルヘイムへ突入してしまうので、そのギリギリまで攻める。ここからヘルヘイムに繋がるとは思えなかったが、念のためだ。このスピードで充分追い付ける。
　心なしかゲンムのスピードも落ちてきたようであり、高笑いも少しずつ威勢を失っていた。次第にゲンムとの距離は縮まって、あと１０秒もすれば追い付ける。光実がそう確信した瞬間・・・
　それは訪れた。
　視界がどんよりとした紫色のオーラで包まれたかと思うと、光実と、彼を乗せたローズアタッカーの時間は止まった。
（これは・・・！）
　自身の肉体が紫色のオーラに押し潰されるような感覚を覚えながら、光実はこの能力を使う可能性のある仮面ライダーについて思考を巡らせていた。
　・・・これは、重加速だ。
　後方より迫る、バイクの走行音。今の光実には振り向くことさえ叶わなかったが、・・・そうする必要もなく、その仮面ライダーは停止した光実を追い抜いて、彼の眼前に躍り出た。
「止まれ」
　髑髏の装飾の施された紫色のバイクを駆るは、それと同じく・・・このゲームの世界にあって当然のことではあったが、紫色の仮面ライダー。
『ミッチ、ハメられた。俺たちはゲンムに誘導されてたんだ。ここは・・・あいつのステージだったみたいだ』
　バグヴァイザーの中から、パラドが語り掛ける。口を動かすことも

ままならない光実は、その仮面ライダーの名を・・・心の中で呟いた。
・・・仮面ライダーチェイサー。
「バイクに乗る時はヘルメットを着けろ。それが人間のルールではないのか？」
それは、誇り高き追跡者の名である。